

25PB-pm161

副作用情報のインフォマティクスによるビジュアル化と網羅的解析～抗アレルギー薬 69 剤での臨床応用

○川上 準子¹, 早川 圭¹, 林 誠一郎², 星 憲司¹, 佐藤 憲一¹(¹東北医薬大, ²明治薬大)

【目的】デジタル化の普及により、医療用医薬品添付文書(PI)等の医薬品情報を容易に確認することができるようになったが、今なお複数の医薬品間で比較する場合や全体的な把握は文字情報が主であり、瞬時にもれなく確認することは容易ではない。複雑な副作用発現情報をビジュアル化することで、短時間での確認や比較を行うことができ、医療従事者の負担軽減や患者 QOL 向上に役立つことが期待できる。近年、アレルギー患者は増加傾向であるため抗アレルギー薬について解析したので報告する。【方法】今日の治療薬 2016(南江堂)に記載されている先発品 69 剤を解析対象とした。PI は PMDA からダウンロードした。PI 記載の「重大な副作用」と「その他の副作用」を収集し、発現有無(有 1、無 0;有無版)と頻度(14～不明 1 まで 8 段階;頻度版)のスコアとして、各々のクロス表を作成し入力データとする。副作用項目は MedDRA/J を参考に統一し延べ 260 項目となった。データマイニング手法である自己組織化マップ(平面 SOM と球面 SOM)を用いて解析を行い検討した。69 剤は作用機序ごとに 8 分類した。【結果・考察】得られた薬剤全体の SOM は、赤～青のビジュアルなマップでほぼ作用機序ごとに配置されたことから、副作用発現の全体傾向は分類ごとに類似性があることが示唆された。「発疹・皮疹」「めまい」「眠気」等ほとんどの薬剤で発現のあるものは、有無版で確認後、頻度版で再度確認することも有効である。軽微な副作用でもその患者にとっては重要な場合もあるので、有無版と頻度版を連携して活用することで代替薬の検討や副作用発現予測ツールとして、患者へのよりよい医療情報の提供と適切な服薬指導へつなげることが可能となる。さらに、医療従事者のリスク管理の補助資料としての活用も期待できる。